「解放の時が近い」

ルカ 21:25-28

2020.10.25 南与力町教会朝拝

序：終末に向かう歴史の中で

イエス様の終末（世の終わり）に関する教えを学んでいます。私たちは終末に向かう歴史の中を歩んでいます。それは輪廻転生のような循環的な歴史観とは異なります。創造という始まりがあり、終わりもある。それが聖書の歴史観です。ではその終わりには何が起こるのでしょうか。今日の箇所にはそのクライマックスともいうべき出来事が記されています。21 章 27 節

「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。」

「人の子」すなわちイエス・キリストが大いなる力と栄光を帯びて再び来られる。それが世の終わりに起こる出来事です。私たちはそのような終わりに向かう歴史の中を歩んでいるのです。そしてイエス様はその終わりに向かう中で世界にどのようなことが起こるのか、予め弟子たちを教えられました。それはそのようなことが起こったときに、弟子たちがどうすべきか、どのような姿勢を取るべきかを教えるためでした。

今日の箇所の前にはエルサレムの滅亡が予告されていました。それは聖書の預言が実現する「報復の日」であり、その日にはイスラエルに神の怒りが下ると告げられていました（21:22-23）。そして 21 章 24 節後半には「異邦人の時代が完了するまで、エルサレムは異邦人に踏み荒らされる」と言われています。「異邦人の時代」とは、異邦人がエルサレムを踏み荒らす時代であると同時に、異邦人に神の救いが向けられ、福音が宣べ伝えられていく時代でもあります（使徒 28:28 参照）。しかしその時代も完了する時がきます。ではその時には何が起こるのか。そのことが今日の箇所、21 章 25 節からのところに記されています。

１．天での徴と地上での人々の恐れ

まず 21 章 25 節には「それから、太陽と月と星に徴が現れる」と言われています。それはどのような徴なのでしょうか。並行箇所のマルコ 13 章 24,25 節には次のようにあります。

「それらの日には、このような苦難の後、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は空から落ち、天体は揺り動かされる。」

そのような徴が天に現れるということです。そしてその時、地上では次のようなことが起こります。ルカ 21 章 25 節後半から 26 節

「地上では海がどよめき荒れ狂うので、諸国の民は、なすすべを知らず、不安に陥る。人々は、この世界に何が起こるのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うだろう。天体が揺り動かされるからである。」

地上では海がどよめき、荒れ狂い、諸国の民（異邦人）はそのとどろきを聞いて当惑し、不安に陥ります。そして人々は恐怖のあまり、そしてこの世界に何が起こるのかとおびえて気を失ってしまう、気絶してしまいます。天体が揺り動かされるからです。では太陽や月や星に徴が現れ、天体が揺り動かされるとき、この世界には一体何が起こるのでしょうか。

実は「太陽や月や星に徴が現れ、天体が揺り動かされる」ということは旧約聖書において繰り返し預言されていたことでした。イザヤ書 13 章 9～13 節には次のようにあります。
「見よ、主の日が来る／残忍な、怒りと憤りの日が。大地を荒廃させ／そこから罪人を絶つために。天のもろもろの星とその星座は光を放たず／太陽は昇っても闇に閉ざされ／月も光を輝かさない。わたしは、世界をその悪のゆえに／逆らう者をその罪のゆえに罰する。また、傲慢な者の驕りを砕き／横暴な者の高ぶりを挫く。わたしは、人を純金よりもまれなものとし／オフィルの黄金よりも得難いものとする。わたしは天を震わせる。大地はその基から揺れる。万軍の主の怒りのゆえに／その憤りの日に。」
「天のもろもろの星とその星座は光を放たず、太陽は昇っても闇に閉ざされ、月も光を輝かさない」。それが起こるのは「主の日が来る時」であり、それは「残忍な、怒りと憤りの日」と言われています。そしてその日には「わたし（主）は、世界をその悪のゆえに、逆らう者をその罪のゆえに罰する」、すなわち世界への裁きがなされます。エルサレムの滅亡においてはイスラエルに神の怒りが下ったのですが、異邦人の時代が完了する終わりの時には全世界の諸国民（異邦人）にも神の怒りと裁きが下るのです。それゆえ地上の諸国民はそのとき、世界に起こることを予期しておびえ、恐ろしさのあまり気を失ってしまうのです。

２．人の子の到来と解放（贖い）の接近

そして 21 章 27 節
「そのとき、人の子が大いなる力と栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る。」
この描写の背景には旧約聖書のダニエル書 7 章 13 節～14 節があります。
「夜の幻をなお見ていると、見よ、「人の子」のような者が天の雲に乗り／「日の老いたる者」の前に来て、そのもとに進み、権威、威光、王権を受けた。諸国、諸族、諸言語の民は皆、彼に仕え／彼の支配はとこしえに続き／その統治は滅びることがない。」
イエス・キリストが再び来られるときには、ここに出てくる「人の子」すなわち神様からすべての諸国民を支配する権威、力、栄光を与えられた者として来られるということです。そしてそれを地上で恐れ惑う諸国の人々が見ることになる。

しかし最後の 21 章 28 節ではこう言われています。
「このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい。あなたがたの解放の時が近いからだ。」
「身を起こして」とは、かがんだ状態から身を起こす、シャンと真っすぐに立つ、ということです。そして「あなたがたの頭を上げなさい」と言われます。これは不安に陥り、恐れ惑う諸国の人々とは対照的です。イエス様はなぜそのようにせよと弟子たちに言われるのでしょうか。それは「あなたがたの解放の時が近いからだ」と言われています。この「解放」という言葉は「贖い、救い」とも訳すことができます。代価を払って買い戻す、奴隷を解放する、という意味があります。しかし先ほど見たイザヤ書では、「主の日」は「怒りと憤りの日」と言われていました。しかしイエス様は弟子たちに、それは「あなたがたの解放の日、贖いの日」だと言われるのです。それは一体なぜなのでしょうか。弟子たちに罪がないということではありません。それにも関わらず終わりの日が「救いの日」になるのは、その日に来られる「人の子」がイエス・キリストであるからです。イエス様はすでに来られ、私たちの罪を

背負って十字架にかかり死んでくださったお方です。私たちの罪が赦されるために、その贖いの代価としてイエス様は血を流し、その命をささげてくださったのです。それゆえイエス様を信じる者は、「主の日」を「怒りと憤りの日」ではなく、「救いの日、贖いの日」として迎えることができるのです。

罪の赦しという意味では私たちはすでにイエス様の血による贖いをいただいています。しかし私たちはまだ完全に贖われたわけではありません。この地上で、この体において生きている限り、私たちには苦しみや悩み、悲しみがあります。しかしイエス様が再び来られる時には、私たちは体も含めて完全に贖われ、神の御国に入れていただけるのです。それゆえその日は私たちにとって「救いが完成する喜びの時」なのです。

それゆえイエス様は私たちに「このようなことが起こり始めたら、身を起こして頭を上げなさい」と言われます。「このようなこと（これらのこと）」とは直接的には今日の箇所で言われている「太陽と月と星に徴が現れ、地上の人々が恐れ惑う」ということでしょう。しかし「これらのこと」にはそれより前に語られたこと、すなわちエルサレムの滅亡や他の終末の徴も含まれると解釈することもできます。21 章 10-11 節では次のように語られていました。

「そして更に、言われた。「民は民に、国は国に敵対して立ち上がる。そして、大きな地震があり、方々に飢饉や疫病が起こり、恐ろしい現象や著しい徴が天に現れる。」

天に著しい徴が現れる前に、戦争や地震や飢饉や疫病という徴が起こる。「これらのことが起こり始めたら」とは、そのようなことも含まれていると考えることができます。「戦争や地震や飢饉や疫病」もやはり人々に不安な恐怖をもたらすものです。私たちが今経験しているコロナウイルスによる疫病（伝染病）も世界の多くの人々を不安や恐怖に陥れました。しかし世の終わりにはもっと恐ろしい現象、この世の秩序が揺り動かされ、世界が滅びるのではないかと思われるようなことが起こるとイエス様は言われます。しかしそのような時にも、いやそのような時にこそ、「あなたがたは身を起こして頭を上げなさい」とイエス様は言われます。それは「あなたがたの救い（贖い）が近づいているから」です。私たちは、世界中の人々が不安や恐れに陥っている時にも、身を起こし、頭を上げ、私たちに救いをもたらすために来てくださる「人の子」イエス・キリストを待ち望むことができるのです。そのような希望をもって主を待ち望みつつ生きてまいりましょう。